JOUHOKU-X

「商店街でプロレス」と聞けば、少し奇異な印象を受ける人もいるのではないでしょうか。血みどろの戦いを繰り広げるプロレスを、商店街のお客さんはどう見るのだろうか…、と。

ところが、「地元板橋に元気と笑顔を！」がモットーの「いたばしプロレスリング」（以下、いたプロ）のプロレスは、地域のヒーローに出会えるプロレスでした。

上板橋北口商店街には「グレート・ピカちゃん」が、ハッピーロード大山商店街には「ハッピーロードマン」が。子供たちは自分の街のヒーローを応援し、一緒に喜び、感動する。そして自分の街がもっと好きになる。

第4回目となる城北－X（エックス）では、いたプロの代表取締役でレスラーのはやて氏と、元TVディレクターでありメディアを駆使してハッピーロード大山商店街や、いたプロを支援する千種伸彰先生（中小企業診断士）に、お話を伺いました。

文：石田 美帆（中小企業診断士）
写真：石田 紀彦（中小企業診断士）

いたばしプロレスリング株式会社
HAYATE
はやて

X

中小企業診断士
NOBUAKI CHIGUSA
千種 伸彰

はやて氏が「商店街」のリングに上がる

司会：いたプロを立ち上げた経緯を教えてください。

はやて：僕はプロレスの世界に三十年くらいいます。メキシコで修行して、東北の「みちのくプロレス」に行ったあと、家族がいた板橋でレスラー養成所を立ち上げました。立ち上げから五年くらいたった頃、上板橋北口商店街さんで、商店街のキャラクターをレスラーにしようっていう企画が持ち上がったんです。「グレート・ピカちゃん」の誕生でした。

それがきっかけで「もう年だし、最後に板橋で何か活動したい」って思うようになりました。自分がやってきたプロレスを、世の中のために役に立てたい。それを手の届くところに返していきたい。それが板橋だったのです。

商店街の人や養成所の卒業生たちと話して、「よし、やっていこう」ってことになりました。…だったのですが、あるとき突然その卒業生たちが姿を消したんですよ。何も言わずに、荷物をまとめて。で、音信不通です。

空中技を仕掛ける、すずき心（しん）選手。
プロレスの前に体操教室を教えてくれたお兄さんが戦うため、子どもたちの応援にも自然と力が入る。
この日は残念ながら、すずき選手はアグー選手に敗れた。

プロレスが始まる前には、プロレスラーすずき心（しん）選手による子どもたちへの体操教室が開かれた。
子どもたちはもちろん、リングの下で見守る大人たちも笑顔がはじけた。

ただ戦うだけではない。緻密なストーリー構成がいたばしプロレスリングの魅力。
ハッピーロードマンなどのベビーフェイス（正義役）の相手にはしっかりとヒール（悪役）が用意されている。写真はディック東郷。

試合会場の後方には、パン屋さんやお茶屋さんなど、各商店街のお店が出店している。
試合前には、各商店街のオススメ商品の紹介があり、休憩時間に購入可能となっている。

くいしん坊仮面にお菓子の首飾りをかけるお子さん。
くいしん坊仮面がお菓子を好むことから、事前にお菓子を用意し最前列で待っていた。いたばしプロレスリングのコアなファンは、各レスラーの好みや定番技をみな把握している。

試合開始前に長蛇の列を作る、いたばしプロレスリングのファンの皆様。
2019年2月17日に行われた板橋グリーンホール大会では、310枚のチケットが完売。満員御礼となった。

トキワダイオーに技をかけるハッピーロードマン

千種先生が「商店街」のリングに上がる

はやて：すごく落ち込みました。「これで本当に終わりだな」って。
それで、商店街の人に謝りに行ったんです。だけどみなさんは、「いいんだよ。君がやればいいじゃないか。一緒にやろうよ」って僕の肩をポンと叩いてくれたんです。
僕はボロボロ泣きました。それで「ああ、この人たちのために、もう一回立ち上がろう」と。
そうやって、いたプロを旗揚げしました。

司会：千種先生がいたプロに関わるようになったのはいつからでしょうか。

千種：ハッピーロード大山商店街のレスラー「ハッピーロードマン」を創ったときですね。

はやて：板橋の商店街連合の集まりで、ハッピーロードの人に「プロレスをやりませんか」って声をかけたんです。すると「今はできないけど、ハッピーロード大山TVっていうのがあるから出てみないか」って。

司会：ハッピーロード大山TVは千種先生のご支援先ですね。

千種：はい。実はハッピーロード大山TVに関わる前、私は商店街支援をやっていませんでした。
診断士になりたての頃、ある商店街のイベントのご支援をすることになったのですが、その商店街の理事長に挨拶に行ったとき「私達は金も出さないし人も出さないから、そっちで動いてね」って言い放たれたのです。「何だ、これ」ってショックを受けて、「商店街ってそういうところなんだ」って思いました。

司会：萎えちゃいますね。

千種：実際はそんなことは無くて、たまたま最初の商店街がそうだっただけなのですが、その後しばらく商店街支援には関わりませんでした。
それから数年経って、ハッピーロード大山TVのご支援を打診されました。
そのときのハッピーロードの事業部長が、商店街を盛り上げているすごい人で。この出会いが大きくて、商店街支援にのめり込むようになりました。
再び商店街に接するようになって、商店街の魅力が分かりました。

JOUHOKU-X

板橋区中小企業診断士協会の会長を務める千種先生。
しかし、ハッピーロード大山ＴＶの収録の現場には中小企業診断士としての顔はなく、純粋に映像作りを楽しむ姿があった。

二人の出会い ハッピーロードマン誕生

千種：スケール感とか、地域に対してインパクトを与えられるとか、地域の人と一緒にいろんなことができるとか。他の地域との連携も楽しいですね。

司会：お二人が出会ったきっかけ、ハッピーロードマンの誕生について教えてください。

千種：最初にプロレスの話を聞いた時は、商店街でやるのは難しいかなって思いました。プロレスって馬場や猪木のイメージで。血も出るし、どうなのだろうって。だけど、はやてさんの試合を見て「いける」と思いました。はやてさんのプロレスって、子供が笑う試合なんです。ガチで戦うんだけど、物語もしっかり描いているんですね。商店街にプロレスする場所が無いのも課題でしたが、それは私の得意分野を活かして、プロレスというコンテンツをメディアでつなげばよいと思いました。だから商店街の人に「やりましょうよ」って言ったんです。

はやて：商店街にはヒーローが必要なのです。ヒーローは応援してもらえる。プロレスを見て、親子で楽しんで、美味しいものを食べて帰る。子ども達がもっとこの街を好きになる。プロレスをやればそうなるって自信がありました。

千種：でも、商店街って意思決定をなかなかしにくい組織なんですね。関係者が多いという構造的に、船頭が多くなりますので。ハッピーロードマンの件もそこにはまりました。だけど、事業部長と二人で「絶対やろう」って決めて。理事会を説得して、資金の確保もして。なんとかハッピーロードマンの誕生にこぎつけました。

司会：お二人の活動で、印象的だったものを教えてください。

はやて：僕は昔メキシコで修行をしていたので、メキシコのローカルプロレスが僕の原点になっています。二年前にプロレスの興行でメキシコに行くことになったのですが、千種さんが「一緒に行く」と。

千種：当時、ハッピーロードマンの真の姿である「大山幸道（おおやまさちみち）」のドラマを作っていました。メキシコ編を作りたいと思って、一緒に行かせてもらいました。

はやて：最初は冗談だと思いました。治安も悪いし、危ないですからね。

千種：ドラマ「大山幸道物語」は、はやてさんからインスピレーションを得て作っていました。大山幸道がつまずいたり、天狗になったり、もう一度這い上がったり。そういったストーリーに、はやてさんの人生を投影しています。だからはやてさんの原点であるメキシコでも、ドラマを作りたかったんです。

ハッピーロード大山ＴＶの生放送でＭＣの谷厚志さんと盛り上がる、まる子選手。2019年2月の板橋グリーンホール大会で10ヶ月ぶりにまる子選手が復帰。復帰戦は、はやて選手との連結式マヒストラルで勝利を飾った。

2019年3月に行われた放送では、大山ハッピーロード内にあるコモディイイダの前で生収録された。
プロレスラーは決して手の届かない存在ではなく、身近にいるヒーローなんだと皆が感じることができる。

二人に対する地域の反応とは

はやて：千種さんは頭の柔らかい、楽しいことは何でもやる人だと思います。そして、昭和のスポ根でもある。僕もドはまり世代なので、共感します。

メキシコは高地で、酸素も薄い。そんな状況でプロレスラーと一緒に行動するのは、本当にキツかったはずです。帰国するころには千種さんはガイコツみたいになっていて、そのあと体調を崩してましたね。相当気合を入れたのだなと思います。千種さんは、そういう損得無しの行動をする人です。だから千種さんとは、損得無しで向き合えるんです。「大山幸道物語」を見たとき、僕は涙が出ました。「僕の職業を理解してもらえた」と思いましたね。

千種：一人で脚本書いて、出演者は全員素人。しかも、治安の悪い知らない所でロケをして、カメラを回す。この制約の中でよく作ったなと、自信になりました（笑）

司会：ハッピーロードマンが誕生して、地域の反応はどうでしたか。

はやて：プロレスを見に来るお客さんは親子連れが多いです。その地域ごとのレスラーが人気で、ハッピーロードだったら「ハッピーロードマン！」っていう声援が多いですね。試合中、技がどん！と出ると「わー！」っと声があがる。この共有感って半端ないんですよ。

司会：そういう瞬間を共有すると、試合終わった後「面白かったなあ」という感情でつながりますね。

はやて：楽しみ、喜び、感動を共有するので、親子は「今日も面白かったね。ご飯食べて帰ろう」ってなる。そうすると、商店街がちょっと潤う。ここに住んでいる人がずっと住み続ける。これが続いていく。このサイクルを作るのが僕の役割じゃないかと思っています。

千種：商店街を活性化するのは「よそもの」か「ばかもの」って言いますよね。私は毛色が違うイベントをやりたがる「ばかもの」ですが（笑）。世の中が大きく変わっているので、イベントも昔とは違ったものにしていく必要があると思うんです。

JOUHOKU-X

「千種さんはそういう損得無しの行動をする人です。 だから千種さんとは損得無しで向き合えるんです。」

はやて：保守的なところは変えていかないと、新しい世代が入っても出て行ってしまう。それって商店街へのダメージも大きいです。

千種：私がハッピーロード大山TVに関わる前、ハッピーロードではマスコミの取材はゼロだったんです。「取材対応が大変だから」と断っていたそうです。でも「商店街が注目されれば人が集まるし、地域の価値も高まります。取材は受けてください。最初は私が窓口やります」と言って、受けてもらうようにしました。今では年間四百件くらいの取材を受けています。

商店街の「荒野の七人」として

はやて：僕は、プロレスをきっかけに僕らと関わってくれた商店街同士をつないで、拡げていきたいと思っています。たとえば、お世話になった上板橋北口商店街の人に「今度ハッピーロードの人に会ってみませんか」って声をかけて、酒の席を設けたことがありました。ちょうど上板橋で街バルが成功した時だったので、その場で「一緒にやろう」って話が始まりました。

千種：それがハッピーロード、上板橋、中板橋の三商店街共催の「東上線バル」のきっかけになりましたよね。ハッピーロードは通行量は微増していますが、売上につながっていないのが課題です。街バルはその課題を解決する力がありますので、私も診断士としてご支援しています。バルの参加者はどんどん増えて、今では八商店街の「板橋バル」にバージョンアップしています。

はやて：子ども達のふるさとを守るためにも、商店街には継続して力を出してほしいです。そのために、千種さんや僕らも活用してもらえたらいいんじゃないかと。僕らは商店街の外の人間だけど、映画「荒野の七人」で村を守った助っ人みたいな役割でいいのかなと。

千種：それいいですね！そういえば東上線バルを「やろう」って決めた時も、外の人間は、はやてさんと私だけでしたね（笑）

司会：最後に、千種先生の考える「診断士のあるべき姿」について教えてください。

千種：私は「学び続けること」と「現場に立ち続けること」を大事にしています。自分の知らない領域は、分からないことも多いし、恥もかくわけです。だけどそれをやり続けないと成長もない。もちろん迷惑かけちゃだめなので、迷惑かけない最低限で。恥をかいてもいいからやり続ける。そうやって、たまたま診断士になったということを、自分の人生の中で最大限活用していきたいと思います。

「自分の知らない領域は、 分からないことも多いし、 恥もかくわけです。 だけどそれをやり続けないと成長もない」

取材を終えて

千種先生には「中小企業診断士」のバッチは必要ないかもしれません。通常、診断士は、診断ゴールを見出すために問題を整理し、解決プランを提示し、アクションに移します。けれど千種先生は、ゴールから求めるのではなく、パートナーと向き合って生み出されるすべてを結果として受け止める覚悟を持たれています。「失敗」でも「成功」でもなく、診断士という「資格」でもない。パートナーが「納得」するかしないかを価値基準とされている。「プロレスが街を育む」というはやて氏の信念に、千種先生が損得抜きで向き合っていることが、はやて氏から千種先生への信頼につながっているのだと感じました。

商店街での取り組みは、その関係者の多さから、とかく複雑になりがちです。しかし「誰と何を信じるのか」という一点でシンプルに向き合うはやて氏と千種先生。そんなお二人の思いや情熱をお伺いできた取材でした。

ポーズの要望にも気軽に応えてくださったお二人。
表面的な付き合いだけではない、二人の関係がこの写真一枚からでも読み取ることができる。

企業情報

■企業名：いたばしプロレスリング株式会社
■住所：〒174-0063　東京都板橋区前野町4-50-2

大会スケジュールはホームページにて随時更新しています。
SOLD OUT続出のチケットはホームページに掲載のチケット販売協力店様からご購入ください。

いたばしプロレスリング　検索

発行者：一般社団法人 東京都中小企業診断士協会城北支部長 長谷川 猛　　編集者：一般社団法人 東京都中小企業診断士協会城北支部 広報部